

光のケーン

藤原恵一

西荻窪の駅を降りて北に四百メートル、五分ほど歩いた右側に、間口が二間、奥行きが四間ほどの興居島屋という小さな古本屋がある。読みにくいのが、ごしまやと読む。店主の祖父が生まれた、愛媛県の沖にある小さな島の名前に由来しているということがインターネットの情報に出ている。今年五十三才になる狩野良平は、六年ほど前から毎週土曜日の午後二時半になると、決まってこの店の周りをうろついている。良平の家はさいたま市の西の外れだから、三十キロほどの距離を車で走って来てここにいることになる。

店の入り口は木枠のガラスの引き戸で、少し建て付けが

悪く力を入れて引き開けなくてはならない。良平は引き戸を開けて中に入る前に、先ず入り口横の百円コーナーに立ち寄る。狭い小さな店の、さらに付録みたいなスペースだから品数は至って少ない。常時二、三十冊も揃ってあればいいほうだ。だがここに、毎週ダイヤモンドか金のような掘り出し物が無造作に積んであるのだ。良平にとっては、欲しいが懐具合を考えればそう簡単に買うわけにはいかない新刊本、あるいは古本でも通常の価格では購入を迷ってしまふようなものが、百五円の値札をぶら下げて店外の棚に放り出されているのだ。それもほとんど毎週、数冊は何かピンとくるものがある。それはもう偶然とはとても

考えられなくて、店主の好みと良平の好みがちがひたりと一致しているとは思えない。店主が自分の好みのものを目玉にして、安く店頭で陳列して置く。それを良平が毎週土曜日定刻に来て、まるで注文してあった品物を受け取るように買って行く、そんな古本屋の店主と買い手の幸福な関係が成り立っているかのようである。もっとも、良平はいつも、百円コーナーで呼び込んで高価な本を買わせようという店主の期待を裏切って、餌の百円本だけを食い逃げする魚のような存在なのではあるが。

ここで良平は、例えばほとんど新刊同様の堀田善衛「定家明月記私抄」上下を各々百五円で買った。探していた本というわけではなかったが、布張りの上質な製本と価格が気に入って、すぐに購入した。新刊本定価は上が千五百円、下が千六百円となっている。安い、と直感した。良平の今勤めている会社は、神田神保町のだ真ん中、岩波ビルのすぐ横にある。門前の小僧ではないが、少しは古本の値段にも感覚がある。翌週になって会社近くの古本街で探してみたら、読み古された古本が仰々しく上下揃いとなって紐で縛り付けられ、定価の半額で出ている。

「定家明月記私抄」はすばらしく面白かった。良平は定家の歌など面白いと思ったことは一度もないが、ここに出てくるうだつの上がない現代のサラリーマンのような定家の人生は面白かった。世の中がどんなに騒がしくなろうと

一向に関心を持たず、自分が昇進しない愚痴ばかりをうとうと書き綴っている。二日間で食べるように読み終え、翌週同じようなものを、と探し出したところ、すぐ同じ著者のちくま文庫版「方丈記私記」が目についた。店主が、「定家明月記私抄」を買っていったお客の次なる欲求を先取りして、お次はこれなどがですか、とさり気なく本棚に置いておいたようにも感じられた。見事なものだ。良平など、出だしの数行しか知らない方丈記と、兼好法師の十分の一ほど知らない鴨長明が、堀田善衛の戦中の経験と二重写しになって立ち上がってくる。

良平がここで初めて見つけた作家は数多い。黒井千次や小川国夫はここで知った。もともと読書は好きだがその範囲はごく狭かった良平が、いささかなりとも目を広げることができたのはみんなこの興居島屋のお陰だ。

ガラス戸を開けて興居島屋の中に入る。暑い季節以外には、いつも薬缶がちんちんちんちんと静かな音をたてて湯気を吐いている。店内に客がいたことはめったになく、たまにいる客は散歩途中の老人が多い。棚から棚へ、老人たちはのんびりと歩いていく。もそもそ、と本を棚から取り下ろす。時間がゆっくり流れている。正月前後のころは、薬缶を下ろして餅を焼いている。遅い昼飯か、おやつの代わりなのだろう。香ばしい匂いが店の中いっぱいひろがっている。切り餅を焼いて醤油だけをつけて食べる、この

店の人が持っているそんなシンプルな生活が垣間見える。ここには火鉢の前にかがみこんで、鼻からずり落ちるメガネ越しにこちらを見返してくるような、典型的な古本屋のおやじというのはいない。良平が本を選んで持つていくと、帳場に座っているのはアルバイトのような若い女性だったり、息子のような若い男だったり、奥さんのように見えなくも中年の落ち着いた女性だったりする。ほんとうはこの中の誰かが店主なのかも知れない。良平が何も言わずに本を帳場の台の上に置くと、店番の人も余計なことは言わずに手早く紙袋に入れてさっと会計をしてくれる。良平がこの店に顔を出すようになって六年だが、まだ店番の人と会話を交わしたことはない。古本に対する専門的な知識がそれほどあるわけでもなく、もともと今この辺にいることをあまり人に知られたくない良平には、この店のこういう対応の仕方はとても好感が持てる。

この日、百円コーナーの中から、良平は黒井千次の「群棲」と小川国夫の「逸民」の二冊を買った。どちらも新刊書のようにきれいで新しい。今日の店番は、今まで見たことのない中年の品のいい女性だった。いつものように黙ったまま会計を済ませると、良平は店を出て善福寺川の方へ向かった。何か特別なことがない限り、毎週のお決まりのコースだ。陽は街の中に溶けて、この後まもなく闇が降り

に渡してきた健一郎のことを思い出すときもある。そういう時はたいいてい、健一郎が車の中で何か大きないたずらを仕出かしたときだ。

健一郎というのは良平とその妻千冬の一人息子で、今は特別支援学校の高等部に通っている。今年で十八歳になる。二人はいつもケーン、ケーンと呼んでいる。ケーンは毎週一回、土曜日の二時半から四時半まで、杉並区の「心の園」という障害児のための療育施設で発達訓練のためのレッスンを受けている。

ケーンが「心の園」に通い出したのは、四歳、まだ幼稚園だったころだ。「心の園」は、千冬が八方手を尽くして探し出した、その筋では少しは名の通った施設だ。以来ケーンが小学部の間は埼玉から杉並まで、ずっと千冬が電車で送り迎えをしていた。時たま千冬に用事があるときだけ、良平が代わりに送迎した。そのころはケーンはまだ電車を使うことができた。

ケーンが「心の園」に通い出す少し前のころが、良平と千冬にとって一番大変なときだった。ケーンが普通の子供とは違うということがいよいよはつきりしてきて、二人で覚悟を決めなければならなかった。千冬はケーンを少しでも普通の子供に近づけるために、ありとあらゆることをした。東京のはずれに評判のいい医者を見つけてきて、リタ

てくる予感に満ちている。強くはないが特別に冷たい風が、良平の足を速める催促をする。車で来た良平は、街中を歩くのにコートを着ていない。薄いセーターの上にはブレザーだけ。二冊の本を脇に挟み、両手をしっかりとズボンのポケットに突っ込んで五分ほどで川のほとりに入る。川といても両岸をコンクリートの護岸に囲まれ、下のほうにわずかばかりの水が流れているだけのものだ。都会の真ん中の川だから、風情に欠けるのはしかたがない。しかしこの水が清水のように透明で、晴れた暖かい日などは悠然と泳ぐ鯉の姿を見ることができる。どんな日だって鯉はいるはずだが、今日のような日にはとても川底を覗く気力が出ない。

駅前からくるバス通りが善福寺川に架かる橋の袂に、良平の気に入っている小さな喫茶店がある。この喫茶店は、川に面した窓もバス通りに面した窓も、全面ガラスで大きく開いている。良平は川とバス通りに面した角の席に座って、興居島屋から今買ってきたばかりの本を開くのが好きだ。その席は店でも特上の席だから、いつも空いているとは限らない。有名な作家たちのように、店員が空けて待っていてくれるなどというサービスはもちろんないから、塞がっていれば黙ってその隣の席に座るまでのことだ。

すぐに本をひろげるときもあるし、その前にちょっとだけ、送ってきてついさつき、興居島屋に入る前に「心の園」

リンヤリスパダール、あるいは大柴胡湯という漢方薬をもらってきて飲ませた。薬はどんなものも、ほとんど効かなかった。太鼓と大きな掛け声で有名な霊感療法にも連れて行つた。こちらはもちろん、まったく効き目がなかった。

放っておけば、その辺のニワトリと同じように何も覚えなかっただろうケーンを捕まえて、その頭の中に一字一語植えつけるようにして文字と言葉を教え込んでいったのも千冬だ。ひらがな、カナタナ、漢字、数字、みんな千冬だ。多い少ない、右と左、上と下、千冬はこういう抽象概念の意味を絵に描いたり、ケーンの身体をひねったりつねたりして教えた。良平はいつもそばでただ立って見ていた。もともとそういう概念の欠如しているケーンは、なかなか覚えなかった。感覚としてわかったのかな、というようになるまで、気の遠くなるような忍耐と長い年月が必要だった。

千冬のお陰で、ケーンはかろうじて文字と言葉を持つことができた。ただケーンはそれを頭のどこか片隅に追いやつてしまつて、自分から自発的にしゃべることはほとんどない。その代わりなのだろうか、普通の人にはちよつと考えられないようないたずらをする。

このごろは、後部座席から運転している良平に手を伸ばしてきて、メガネをぱつと抜き取っていくといういたずらが多い。たいいていは抜き取られる前に気づいて手を払いの

けることが出来るが、完全にはずされて持っていかけた場合は悲惨なことになる。取り返しても、たいていは弦が曲がって使い物にならなくなる。走行中なのに、ドアを開けようとして取っ手をガタガタ引張ることもある。この場合はチャイルドロックがかかっているから大丈夫なのだが。シートに膝をついて後ろ向きになり、後続の車をじろじろ見回す。すぐ後ろの車の人は感じが悪いだろうが、実害は何もないからこんなのはいたずらの数には入らないかも知れない。後ろの席でゴミ箱の中に小便をする、ゴミ箱の中に捨ててあったいつものものかわからない缶ジュースを飲む、カラスのような声で笑い出す、突然手を伸ばしてきて髪の毛を掴む引張る振り回す。それをいたずらだと思っただけはこちら側の世界に住んでいる人間の認識で、本人にとっては何か止むに止まらない衝動行動なのかも知れない。

中等部に上がったところから、一箇所にじつとしていられないケーンの異常行動は激しくなってきた。電車の中をばたばた走り回るようになった。メガネへの関心が芽生えたのもこのころだ。隣りの乗客のメガネを電光石火の早業でサツと抜き取る。取られた方は一瞬何が起こったかわからずにきよとんとしている。ケーンのほうでもメガネを手を抱えたまま、きよとんとしている。抜き取ってどうしようというのではない、ただ抜き取ることだけが絶対至上の目的なのだ。だから抜き取ってしまったあとは、手に

持ってしまったメガネをどう扱ったらいいか自分でもわからないのだ。

他人が食べているものをひよいとひったくる。立っている子供を突き飛ばす。力の弱そうな老人のそばにサツと寄っていつては、背中をバーンと思いきり叩く。ケーンはそのバーンという甲高い派手な音が気に入って固執しているようなのだ。その他、電車の中ではないが、止まっている車のドアを開けるとい行動が出てきた。歩いている途中に車が止まっている、ケーンがすばやく取っ手を引くと、ドアは百発百中、すぐに開く。ケーンは歩いている最中に目を使ってすばやくドアロックの有無を確認しているのだ。それにしても、停車中にドアロックをしていない車の何と多いことか。ドア開けの問題行動はエスカレートしていつて、止まっている車ばかりか、最近ではゆっくりと走っている車にまで手を出すようになった。走行中に得体の知らない他人にいきなりドアを開けられるという、この世にあってはならないような椿事に出くわした運転手の驚きよう。強盗だつて、せめて停車中に押し入るくらいの礼儀は弁えていられるように。良平は驚愕のあまりあんぐりと見開かれた運転手の目を何度見させられたことか、そのたび運転席に向かつて何度頭を下げたことか。正常な男の子なら、通り魔事件として警察沙汰になりかねないことをケーンはすいぶんと仕出かしてきた。

中等部一年の夏から、「心の園」へのケーンの送迎は周りに迷惑をかけないように、車で行うことにした。千冬も運転はするが、交通量の多い都内を走るのはいささか自信がないということで、ケーンの送迎は専ら良平が担当することになった。

それまでは土曜日の午後は、良平にとってはもつとも寛げる貴重な時間帯だった。普段はうるさかたて音楽をかけるせいでくれない千冬もいない、部屋中を落ち着きなくばたばたと行ったり来たりするケーンもない。良平はポリリズムをたつぷり上げて一人好きなオペラを楽しむことができた。この時間帯があるから、BS放送のオペラ番組を楽しむに録画して溜め込むようになったし、好きなDVDを選んで買うこともできた。一人で淹れて一人で飲むコーヒーのうまさにも気づいた。もうずっと一生、この時間を失いたくないと思っていた。

ケーンを毎週車で送迎するようになってから、土曜日には良平は朝から何も出来ない。庭の草むしりのようなちよつとした力仕事をするだけで、午後の運転中に激しい眠気が襲ってきて危険極まりない事態になるからだ。ちよつとそこまで思っ出て出かけても、帰りの時間ばかりが気にかかって落ち着かない。良平は土曜日がくると、なるべく朝寝をして、それから家の中で愚図愚図している。昼飯はな

るべく早く、軽めに、腹六分目くらいに済ませる。それでも西荻窪へ向かう途中で、埼玉を抜けて東京へ入ったところ、睡魔はいつも必ず突然に襲いかかってきた。良平はさつそく用意のカフェイン入りのガムを噛む、一枚だけではだめで、二枚、三枚……と噛み続けていつて、五枚ほど噛み終わるころによくやく眠気は少しだけ晴れてくる。が、それでも完全に睡魔を退治することはできない。今度は取って置きのミント飴を取り出す。一番ミント度の強い毒々しいブラック色のミント飴、こいつを舐めまくる。やはり五粒ほどきたところで、胃がやられて、爛れて、悲鳴を上げる。この胃痛と引き換えに睡魔はようやくのこと頭から退出していく。

六年前にケーンの送迎を始めたときから、良平はこんなことをごく最近まで繰り返していた。慢性の胃炎を起こし食欲をなくして、毎晩楽しみにしている酒の顔を見るのもいやになったこともある。それでも居眠りをして事故を起こすことに比べたら、遥かに増しだと思って耐えてきた。

最近になって良平はあるうまい方法を見つけた。出発前の三十分、いや時間のないときには十五分でもいいから、二階の八畳の和室に大の字になって眠るのだ。眠れなくても、横になって何も見ず、何も考えずに目を閉じているだけでいい、その効果は絶大だった。この方法をみつけた最初のときそうしたように、眠るとき良平はいつも枕元

に置いたラジカセでシューベルトのピアノソナタをかけた。小さな音でかけると、曲の表情はコンポで聴くときとはまるで違って、シューベルトは子守唄になる。ケーンが生まれる前、千冬と出会う前、友人たちと時間に気兼ねなく普通に会い、あちらこちらへと身軽に旅行を楽しみ、居酒屋を夜遅くまで飲みまわっていたころのことが、ずいぶん遠い世界の他人の出来事のように、頭の底の方で淡い色に浮かび上がってくる。目を瞑る瞬間に、夏は開け放たれたガラス戸から二階に届くほど大きく育った百日紅の濃いピンク色の花が、いくつもいくつもペランダの中へ咲き零れているのが見えた。冬は立て切ったガラス戸の向こうを、木枯らしの黒い泣き声が渡っていくのが聞こえた。その間だけ、二階には千冬もケーンも上がってはこなかった。良平だけの静かな時間だった。

車はケーンの「護送」専用になった。チャイルドロックは左右とも常時施錠し、外から中が見えないように、後部座席とリアの窓ガラスには黒いフィルムを張り渡した。メガネ対策にはずいぶん苦労した。前座席と後座席の間にタクシーのような仕切り板を立てたいと思ったが、この施工をしてくれる工場が見つからない。思い余ってタクシー会社にも相談してみたが、そんな、個人への対応はやっていないという回答。メーカーにもディーラーにも問い合わせ

良平が睡魔と闘っているときも、睡魔から解放されて快適に走り出したときも、車の中にはいつも榎原敬之の音が響いている。ケーンは榎原敬之のファンなのだ。「どんなときも」や「もう恋なんてしない」はケーンの好きな曲で、一曲終わると必ず低い声で、「もう一回かけてください」

と振り絞るように言う。そのたびに良平はCDを戻してかけ直す。好きな曲を三回聴くと、ケーンはやっと満足して次の曲に進む。ケーンは車の中ではこの榎原敬之ともう一枚、松田聖子のCDを聴く。これは千冬が若いころファンだったせいで買ったもので、「あなたに逢いたくて」、「スウィートメモリーズ」、「瑠璃色の地球」のような大人になつてからの曲を中心に編んだアルバムだった。意味がわからなくても、ケーンは曲の感じで好きになったのかも知れない。榎原敬之が終わると、ケーンはさっそく低い声を出す。

「今度は松田聖子にしてください」

松田聖子が終わると、同じような低い声がくる。

「また榎原敬之にしてください」

そしてケーンが行きの車の中でしゃべる言葉は、これがすべてだった。

ケーンは車から降りて「心の園」へ入っていくとき、靴

てみたが、埒があかない。自分で作ろうかとも思ったが、ちゃちなものではケーンに簡単に壊されてしまう。ケーンは馬鹿力ときたら、何しろ半端ではない。度のついた水中メガネも検討してみたが、度の強い良平に合うものがなかった。結局メガネの件は、メガネの弦の端から端までをゴム紐で繋いでおくことにした。こうすれば、引っ張られてもそのまま後ろへ持っていられる。こうすれば、引っ張られてもそのまま後ろへ持っていられる。こうすれば、引っ張られてもそのまま後ろへ持っていられる。

睡魔から解放され、メガネをゴム紐で繋いでしまうと、ドライブは快適だった。すれ違う車や並走する車を見る余裕がでてきた。都内へ入ると、よくドイツ製の高級車やイタリア製のスポーツカーを見かけるようになる。結婚する前や、結婚してもケーンが生まれる前までは良平もずいぶんと高級車への夢を膨らませたものだ。中古でもいい、いっぺん手に入れて自分のものになりたい、街の中をウォーンと腹に響くような音をたてて乗り回してみたい、その車で山へ行きたい海へも行きたいと、何度月並みに思いつめたことか。廃車寸前のポルシェを安く買ってきて一回だけ乗って、ああ……と声を出して満足して、そのまますぐ廃車にしてしまうなどという愚にもつかない計画を本気で検討したこともある。今ではもうケーンのために一生涯が湯水のようにかかることがわかっているから、そんなものに興味を持つことはない。額縁の中の美しい絵を見るように、それらの車たちを眺めることができる。

を脱いで下駄箱にしまつてから、こちらを向いて直立不動になり、ぎこちなく頭を下げて挨拶をする。

「お父さん、行ってきます」

小さいころからの躰で、杓子定規に、鸚鵡返しのように言うだけなのだが、いざ言われてみれば悪い気はしない。だがこれも、何年もかけて「心の園」の先生たちと千冬が、動物に芸を仕込むように教え込んだ賜物なのだとということ。良平はよくわかつてる。

初めて「心の園」へ通い出したころ、何かちよつとした出来事をきっかけにしてケーンはよく泣いた。泣くとき、ケーンは最初はゆっくり、それから徐々に泣き広がって行って、最後には手のつけられないほど激しく泣き疲れるまで泣く。

何かの折、千冬に用事があった、良平が一人でケーンを送っていったことがある。このころはまだケーンは電車を使うことができた。電車の中も駅から「心の園」へ歩いていく途中でも、ケーンはとも機嫌がよかった。にこにこしたり、後ろの良平を振り返ったりしていた。にこにこしているときのケーンは、良平の目で見ても誰の目で見ても、縦から見ても横から見ても斜めから見ても、文句なく天下の一品にかわいい。ところが「心の園」へ着くなり、玄関の前でケーンはいきなり大粒の涙を流して雷のように泣き出したのだ。何がどうしたのか、良平にはさっぱり見当もつ

かない。何か引き金があるのだろうかとは思っても、それが何なのかわからない。ケーンの引き金は、ほんのちよつと止まっていた自転車が今日に限って止まっていなかった、というようなことで、突発的に引かれる。万一のときの備えに、千冬が鉛玉を持たしてくれたのだが、恐る恐る差し出す鉛玉になぞ、ケーンは見向きもしないで泣くことに全力を注いでいる。こうなれば良平一人の力ではどうしようもない、途方にくれているしかない。良平はこういふときの自分の無力をよく理解している。ケーンのそばに、良平はなす術もなく杭のように突っ立っていた。

そのとき玄関のドアがあわただしく開いて、中から一人の先生が小走りに出てきた。それは、「心の園」の中で一番頼りになる若い女の先生だった。外で愚図っている子供に、早く帰って来てくれたのだ。先生は小鹿のようにケーンのそばへやってきた。そのままケーンの泣くのをじっと見下ろしている。良平は絶望の思いで先生を見ていた。先生は少しづつ少しづつ腰を下ろしていつか、ケーンと同じ目線になるとケーンから目を逸らさずに言った。

「ください、その鉛玉をください」

横向きに掌だけ、良平のほうに差し出してきた。ケーンに渡しそこなって握っていた鉛玉を、良平はそつとその細

楽しんでいたりした。一人でいることに飽きてくると、ようやくダイナミックダンスの現場を覗きに行く。体育館の中では、軽快な音楽のリズムと太鼓の音に合わせて、百人ほどの子供とその親が輪のようになって同じ方向に走っている。ドーンという太鼓の音を合図に、百人からの全員がぱつと方向を変えて走り出す。右へ回ったり左へ回ったり、それとドーンドーンという腹の底に沁み入るような野太い響き、ある意味でもっとも単純で原始的な踊りを踊っているようで、見ているこちらもだんだんと興奮してくる。やがて、惚感が広がってくるのだらう。ケーンなどのように普段はほとんど無感動に過ごしている子供も、こういう場では身体と頭に、何か鈍い大きなものが突き刺さるような刺激があるのかも知れない。

ケーンが小学部に上がる直前に開かれたこのダイナミックダンスの場で、プログラムの合間に「一年生になったら」という歌を歌ったことがあった。みんなでこの歌を歌っている中を、その年の四月に一年生になるといふ子供が何人か選び出されて、小さな背中からはみ出すほど大きなランドセルを背負って他の子供たちの人垣の前をくるくる回るのだ。ケーンたちは前から練習を重ねていたらしく、歌声は立って見えている良平の耳にもはっきりと響いてきた。一年生になったら、一年生になったら、友達何人できるかな

い掌の上に置いた。

「ケンちゃん、さあ、鉛玉よ。これをあげるから、泣きやみましょ」

先生はケーンのみだけ見ている。柔和な、それでいて甘えなど許さないという決意の凄さを秘めた目。横から見ている良平が震え上がりそうになる。鉛玉なんか欲しいはずもなく、先生の言った言葉の意味も理解できたかどうかかわからないが、あんなにも人と視線を合わせるのが苦手なケーンが目が、魅入られたように先生の目に焦点を結び、先生の手から鉛玉を受け取った。涙はまだ頬を伝わり、痙攣のようなすすり上げは断続していたが、地割れを惹き起こすような泣き声は鳴りを潜めた。ケーンの鉛玉をしゃぶる音がばかに大きく響いてきた。

「心の園」では教室での通常の療育とは別に、一ヶ月に一回あちこちの教室から子供を一手に集めて身体を激しく動かすことを中心としたダイナミックダンスという体育指導を行っている。場所は大勢が集まれる所というので、公共施設の広い体育館が選ばれることが多い。ダイナミックダンスは日曜日に行われるので、その日は良平が車を運転し、千冬とケーンを乗せて出かけることにしていた。

たいていの場合良平は二人を送り届けるとしばらくの間お役御免になり、近隣の喫茶店に入ったり周辺を散歩をしたり、暑いときや寒い時は空調の効いた車の中で居眠りを……というあの懐かしい歌詞。良平も幼稚園のころ希望に胸を膨らませながら歌ったような記憶がある。しかしケーンも、そこでランドセルを背負って一生懸命歩きまわっている他の子供たちも、ほんとは一年生になったって二年生になったって、その先何年生になったって、人と接することがまるきり苦手なのだから、友達などという種類の人間はできるわけではないのだ。それでも歌の文句だけを覚えて、手をつなぎあって大きな声で歌いながら人垣の周りを回っているケーンたちを見てみると、良平にはこの子たちにも本当に友達がたくさんできますように、と祈るような気持ちがかみ上げてくる。

気がつくくと良平はいつの間にか先払いの会計を済ませて熱いコーヒーを受け取り、いつもの席に座っていた。三年前に前の会社を退職して今の会社に移ってきたころから、何か考えごとをしているとその間に起こった出来事の記憶がよく飛ぶようになった。買って来た小川国夫の「逸民」が開かれて目の前にある。開いた記憶もない。この作家のものは、筋がないところがいい。筋が面白くても、文章に工夫がなく構成も今ひとつという小説は結局面白くない。筋などなくても、作者の息吹、魂がきらきらしているようなものもいい。頁を開いて入っていくと、小川国夫のあの、顕微鏡で見るような、あるときある一瞬の、微視的な世界

がひろがっている。

喫茶店の中というところは、読書をしていても考え事をしていても、完全には集中することができないものだ。少なくとも良平の場合はそうだ。少し集中していても、コーヒーをちよつとひと口、と思つて顔を上げると、もう集中はパァッと蜘蛛の子を散らしたように逃げていく。真正面の窓の向こうは善福寺川。川沿いの遊歩道をビニール袋を提げて足早に歩いていく主婦の姿が見える。コートも着ない学生のような若者が落ち着きなくせつせと小走りに行く。みんな寒くても平気だ。川の向こう岸の家の庭には、熱帯植物のアロエがびっしりと群生している。あれだけ大きくなつてあれだけ群生していれば、大雨が降つたつて猛烈な寒さが来たつて、もう枯れる心配はないのだろう。主婦も学生もアロエも、東京はみんな元気だ。アロエの群生に、川筋を這つてきた薄い西日が射しかかっている。冬は今はこの薄い陽がすぐに暮れて、やがてケーンを迎えにくい時刻がやつてくる。

良平は腕時計に注意していて、きつかり四時十分に店を出る。暮れかかった西荻の街を意識してゆつくり歩いて、「心の園」に着くのは四時二十分過ぎになる。寒いけれど我慢して、玄関の前でもうあと一分か二分、時間を潰す。本当は四時半の迎えなのだが、四時半に着いたのではもう何人か迎えの先着がいて、たつぷり待たされることになる。

ない顔がほつと一瞬輝いたように光る。口元が緩んで前歯が少し顔を出し目尻に皺が寄る。輝きは顔全体を這うように広がつていき、それからマッチの火が消えるようにあつという間もなく消える。再び口は堅く閉じられ、顔は表情を掻き消す。ケーンはすぐにまた元の、いつもの能面のよくな顔に戻つていく。良平はその一瞬のケーンの輝きを見たいために、毎週土曜日の午後を潰して送迎をしているようなものだ。

ケーンを連れて車の所まで戻る間、一抹の不安がある。駐車違反で、車を持っていかれてしまつていないのではないかと不安だ。実際にはケーンの乗る車は駐車禁止解除の扱いを受けていて、解除票をフロントガラスの所に出してあるのだが、一度、「ここは通行の邪魔になる」という訴えが近所からありました。移動願います」という紙が張られていたことがある。良平は路上駐車する場合、道幅の十分にある、出入りの邪魔にならない場所を慎重に選ぶのだが、止めてあるだけで目障りだという人もいるのだろう。そういう人から連絡を受けて警官が来て、キップを切るかレッカー移動させようとしたところ、駐車禁止解除票が貼つてあるのを見て、仕方なくお願いの紙を貼つて帰つたのだらう。それ以来良平は、駐車違反にはならなくとも、レッカー移動させられているのではないか、偏屈そうな近所のおやじが難しい顔をして腕組みをしながら、文句の一つ

子供たちは一人ずつ玄関に呼び出され、そこでぐずぐずとジャンパーを身につけ、靴を履き、それから先生と皆さんに向かつてさよならの挨拶をして帰っていくからだ。そんなことはもちろんおくびにも出さないが、夏の暑いときや冬の寒いときには、たまらなくいらいらする。暑くもなく寒くもないときでも、同じようにいらいらする。自分のことよりも、教室の中ですべての授業を終え、今はじつと膝を折つて床に座りながら迎えの順番を待っているだろうケーンが不憫でならない。以前迎えが少し遅くなつたとき、座つて首を伸ばしながら、ドアの隙間から一生懸命良平の姿を探しているケーンの不安そうな視線に出会つたことがある。そのときから良平は、ケーンの迎えは他の親を押し退けても何が何でもいの一に、と自分の心に固く決めていく。

外でぐずぐずしている良平は、他所の家の迎えが角を曲がつて姿を現すやそれを合図のようにして玄関の中に入つていく。子供たちはみんなまだ授業をしている。良平はいかにも今日は少し早く帰る必要があるような風を装い、申し訳なさそうに、小さな声を出す。

「狩野健一郎です、少し早いです、お迎えお願いします」

先生に連れられて玄関先に出てきたときのケーンの表情が良平は好きだ。苦痛と不安から解放され、いつも表情の

も言おうと運転手の戻つてくるのを待ち構えているのではないかと不安から解放されることができない。

だから良平は、自分の車が無事に道端に止まつているのを見るとまずひと安心する。それからフロントガラスに何も貼つてないこと、まわりに危険な人物が誰も立っていないことを確認すると、ようやく全身の緊張を解くことができる。ケーンを後部座席に座らせ自分も運転席に座ると、また軽い緊張がくる。これから家に着くまで一時間半、何もなければそれに越したことはない。だがケーンを車で送迎するようになって六年の間に、何回か小さな事件は起こつていて、それはみんな帰り道での出来事なのだ。行きは緊張しているせいか、問題が起こつたことはない。

青梅街道を環八へ左折しそこなつたことがある。考えごとをしていたわけではない。いつもかかっている横原敬之の歌に熱中していたわけでもない。ほんやりしていたわけでもないのに、ちよつとのタイミンで左折車線に入り損なつてずると真つ直ぐに行つてしまつたのだ。幸いなことに直ぐに比較的広い十字路があつたので、良平は喜んでそこを左折した。その先でもう一つまた十字路を見つけて、そこを左折して環八に戻るつもりだった。内心でほつとしたのもつかの間、道はどんどん右にカーブしていき、環八にくると背を向けたようになって離れていく。適当な十字路も一向に出てこない。いらいらが不安に変わり始

めたころ、やっとそれらしい十字路が出てきた。ばかめ、遅いぞなどと口走りながらいそいそと左折したが、行けども行けども環八が出てこない。片側一車線の普通の道ならいくつか横断したが、どう楽観的にみてもあれが環八だったとは考えられない。良平の車にはナビがついていないので、どこを走っているのか皆目見当をつけることが出来ない。変だ、変だと思っていると、はっと思い当った。このあたりでは、環八は地下に潜っているのだ。車は今環八の上を通り越して反対側に出て、環八から悠然と離れて行っているのに違いない。良平は一つ覚えの一本道で埼玉から西荻窪まで来ることが出来るが、この辺の地理に詳しいわけでも何でもない。ちよっと定期航路を外れば、極端な話もう右も左もわからないのだ。いつメガネに飛びついてくるか知れないケーンを後ろに乗せて、真っ暗な中をヘッドライトの明かりだけを頼りに知らない道を走る心細さ。昔、道なんて、いくら迷ったって、所詮全部繋がっているのさ、平気平気、などとうそぶいていたやつがいたつ。そいつの言葉が、ばかに憎たらしく蘇ってくる。いくら道は繋がっているといつたって、こっちは今、ケーンが腹を空かせる前に家に帰りつかなければ大変なことになるのだ。あいつめ、あんなことを抜かしやがって。今すぐにここに呼び出して思いきりぶん殴ってやりたい。あの糞野郎め、馬鹿野郎めが。良平は自分の非を棚に上げて、こめかみに

も左にも、車の影はなかった。背筋を冷たいものが一気に流れた。雪が小止みなく降り続いてた。雪のせいで危ない目にあつたが、また雪のせいで人身事故からも衝突事故からも救われたのだ。この道はそれ以前に、左折しようとして自転車を危うく撥ねそうになったことがある。右側ばかりに気を取られていて、左側から来る自転車に注意が逸れたのだ。そのときはたまたま千冬が助手席に乗っていて、その「アブナイ！」という叫びに助けられた。あとで、自転車の若い男と千冬にさんざん罵られた。若い時分と比べると、良平の注意力は明らかに散漫になっていて、それは普段から薄々感じてはいたのだが、このときほどはつきりと実感したことはなかった。ただ、注意力がどうなるうと、右と左の区別がつかなくなろうと、良平の足と手の動く限り、ケーンの送迎は止めるわけにはいかないのだ。

「心の園」を出発して三十分、閉め切った窓の外をヘッドライトが波頭のように押し寄せては引いていく。以前に一度だけ道を間違えたことはあるものの、良平にとっては通い慣れたルートだ、普段はただ流していけばいい。横原敬之の声だけが響いている防音室のような空間。聴いているのかいないのか、バックミラーに写って身じろぎ一つしないうケーン。窓の外の闇を見ている。見続けている。良平はケーンの顔を見ている。良平が後ろを振り返ったときだけ、

青筋をたてて歯軋りする。

スピード違反で捕まったのも、環八の井荻トンネルを走っているときだった。前の車についていたら、八十キロはすぐに出た。前の車はそのままスピードを上げてどんどん見えなくなってしまう、良平が先頭に出たとたん、後ろの死角から白バイが迫ってきた。

「前の車はもつとすごいスピードを出して、先へ行っちゃったんだけどねえ」

よほどそう言いたい気がしたが、言ったところで許してくれそうにないと思い、黙ってキップを切られた。環八のこのあたりは、良平の鬼門だ。

雪が激しく降った日、それでも「心の園」には車で行った。タイヤチェーンの用意はないので、裸のタイヤのまま走った。行きは何事もなかったが、帰り道、「心の園」の前の細い道からバス通りへ出るところで、一時停止しようとして踏んだブレーキに、回転を止めたタイヤがそのままズルッと雪の上を滑った。車体はブレーキを踏む前より勢いを増してスーッと滑っていき、そのまま一気にバス通りに飛び出した。普段なら人通りの多い道で、歩道には必ず人影がある。ぎゃっ、轢いた、と目を瞑った。が、人はいない。よかつた、と思うまもなく、わあ、車だ、ぶつかる、と凍りついた。車体は手前の車線を突き破り、向こう側車線の半分くらいのところまで飛び出してやっとならなくなった。右に

ケーンはどんぐり眼を大きく見開いて良平の目を見ている。何も語っていない目。何も見えない目。その目を通して、良平はケーンの中に入っていく。ケーンの頭のまん中に座り込む。

ケーンの魂がゆっくりと立ち上がってくる。良平はその魂と話を始める。

どうだった？ 今日「心の園」、うまくいったか？

うん、うまくいった
そうか。今日は何やったんだ？

三桁の足し算と引き算。みんなうまくできた
ほう、じゃあ、先生、誉めてくれたか？

うん、誉めてくれた、うれしかった
そりゃあよかったな。帰ったらママにも誉めてもらおう
できないときは、僕、すごくやさしいけど

ケーンの声は良平の頭の中に直接に響いてくる。

ケーン、世の中、面白いかな？ いやなことなんか、ないか？

面白いことなんか、ひとつもない。いやなことばかり
うむ

僕は、人の言ってることが、ほんのちよつとしか、わか

らないの。くやしい、悲しい、情けない。でも、僕が思うってことだつて、みんな知らないんだ。パパだつて、そうだろ？ 知らないだろ？

ケーン、ケーン、何を言ってるんだ、パパが知らないでも思ってたか？ パパはな、ケーンが考えてることなんか、ちゃんとわかってるんだ。ケーンがほんとうはどんな子か、ちゃんとわかってるんだ

そうなんだ、パパは、わかってたんだ。じゃ、僕の今一番つらい、ほんとうのほんとうの悩みつて、なんだか、わかる？

良平は、バックミラーを使って一瞬、ケーンの顔を覗き込む。ケーンの白目勝ちの大きな目もともととフーッと大きく膨らんでいって、ケーンは目だけになる。

ケーンの悩みか、一番の悩みか

ケーンの頭が微かに上下している。そう、そう、それだよ、パパ、それでいいんだ。ケーンはそう言っている、よくな気がする。ケーンに促されて、良平は前に出る。

それは、……それは、……、自分が人の言うことをちょっとしかわからないことではなく、自分がふつうの子ど

ものできることをふつうにできないということでもなく、つまり、そういうことによって、パパとママと、学校の先生と友達と、自分のまわりにいる人たちすべてに心配をかけているということじゃないかな

そう、そうだ、そうなんだよ。僕は自分のことより、自分のことを心配してくれている人たちに大変な迷惑をかけている、それがいやでたまらないんだ。迷惑をかけたって謝ることもできないし、迷惑をかけないようにすることもできない。同じような失敗を今日もしてしまつたし、明日もするし、これからもきつとずっと続けることになるんだ。そうするのは、僕の意思なんかじゃぜんぜんないのに。僕のほんとうの気持ちとはぜんぜん別のところで、身体や手や足が勝手に動いて悪さをしてしまふんだ。したとたんに、あつと思つても、もう遅いんだ、もうした後なんだ。そんなときでも、僕は自分から謝ることすらできない、周りの人から、謝らつて、強制的に謝らせられるとき以外はね。僕はそれが一番つらい……

……対話。良平とケーンの無言の対話。良平もケーンも、現実には言葉を出してはいない。良平は前を向いたままハンドルを握っているし、ケーンは目を移して、今は再びじつと暗い窓の外を見ている。だが、ケーンは頭の中で、確かに話している、良平にはそう思える。ケーンは確かに、

何か言っている。現実には何も言っていないし、本当に何も言っていないのかも知れない。だからこれは、究極的には良平自身の独白だ。それが良平とケーンとの対話という形で進行している。狭い車の中で、ケーンの存在という介在者を通じて、ケーンは何も言っていない。そしてケーンの存在そのものが、すべてを言っている。

そうやっていっているうちに、五時になる、五時に、五時、五時、そう、五時になる……。いつしかケーンが目がダッシュボードの時計の文字に吸い寄せられている。瞳が猫の目のように細く光って、蛍光色の文字を吸い込んでしまふうだ。きっかり五時零分零秒。後部座席から、ケーンは突然低いお経のような声を絞り出す。

「アヴァンティにしてください」

ケーンの合図を待つて良平がラジオのスイッチを入れると、往路から何回も繰り返しかけられてきた横原敬之と松田聖子のCDはここでもうやくお役御免になる。

「アヴァンティ」というのは、FM東京で毎週土曜日の五時から放送する音楽と雑学の番組だ。もともとは麻布仙台北上の路地を入ったレストランのウェイティングバーの名前で、土曜の夕方、そのバーに集うさまざまな人たちの酒を飲みながらの会話を、主人公の常連客が盗み聞きをするという凝った構造になっている。主人公は大学教授で、そ

の他に美人のマドンナや嫌われ者やの常連客がいて、これにスターンという外人のバーテンダーが絡み合つて、楽屋裏でいろいろ問題を惹き起こす。毎回集まってくるゲストはよくもこれだけと思つて、音楽、芸能、出版など各界の著名人ばかりで、毎週この番組を聴いていけば時代の最先端のテーマとそれについての一通りの知識が身につく仕組みになっている。合間合間にジャズやシャンソンがさつとかかつて、スポンサーの酒のコマーシャルもなかなか風味が利いている。酒の中でもウイスキーなどにはほとんど見向きもしなかつた良平が、このスポンサーのシングルモルトをわざわざ三越まで行って買ってきて、うまいと思つて飲み始めたのは、まったくこのコマーシャルの賜物だ。

良平にとつてはこの上もなく面白いゲストのおしゃべりも音楽も、ケーンはおそらく何一つ理解はしていないだろう。それでもケーンは、じつと聞き耳を立てている。あるいはジャズが流れるときくらいは、肌が何か感じとつてくるのかも知れない。残念ながら良平にもその辺のところはよくわからない。ケーンが生まれてから十八年、ケーンに寄り添うように生きている良平にしても、ケーンの間違った部分はまだ山ほどある。

良平は、ケーンが生まれて、ケーンの障害の状態がはっきりしたときから、会社が終わるといつもまっすぐに帰ってきた。特にケーンが物心つくようになって、赤ん坊のと

き以上に手がかかる状況になってからは、もうほとんど例外がなかった。同僚が酒を飲むときに、麻雀を囲んでいるときに、ゴルフをやるときに、いつも良平は誘いを断って帰ってきた。ケーンの話は職場では特に何も話してはいなかった。夜や休日の誘いを断る度にみんなから不思議がられた。付き合ひの悪いやつだと思われただろうが、良平はもうきっぱりと割り切ることにしていた。

まっすぐに家に帰ってくる、ケーンの顔を見る、頭を撫でてやる、麦茶をコップに注いで飲ませてやる、歯磨きを見守り仕上げをやってやる、風呂と一緒に入って身体を洗ってやる、拭き切れない濡れたままの背中をよく拭いてやる、寝室の空調を整えてやる。良平がいなければ、それらは千冬がやるだろう。しかももっとうまくやるだろう。しかし良平は自分がやることにこだわった。千冬ももう、良平がケーンに取りかかっているときには、いっさい手を出してこないようになった。面倒だったそれらケーンの世話は大んだん面倒ではなくなっていく、面白くなり、それから当たり前な生活の一部になった。自分のことをやるように、ケーンと自分の二人分のことを自然にやるようになってきた。ときとして良平は、自分という人間は、ケーンをこういうふうに使話をしながら一生を過ごしていくために生まれてきたのだ、と思うことがある。若いころ、骨身を削って勉強したことも、生活に有利な就職先を見つけて歩いた

ことも、結婚の相手を探し回ったことも、すべてはこのケーンとの出会いに収斂されていくような気がする。

「アヴァンティ」はまだ続いている。「アヴァンティ」のゲストはみんな斯界の第一人者ばかりだから、話はずまいし、何よりも自信に満ちている。外は暗くても、明るいカクテル光線に照らされてピカピカ輝きながら酒を飲み取って置きの話聞かせてくれている。車の中は、良平とケーンだけだ。外も中も、真つ暗闇に覆われている。ああいう賑やかな場所で華やぐ機会は、良平にはもう、ない。ケーンにも、ない。家と特別支援学校と、「心の園」だけの往復。明るいもの、華やかなものは、何一つない。今この瞬間もないし、これから先も、もうずっとない。ケーンと二人だけ、その世界があるだけだ。孤独、寂しき、惨めさ、そして不思議な高揚感。

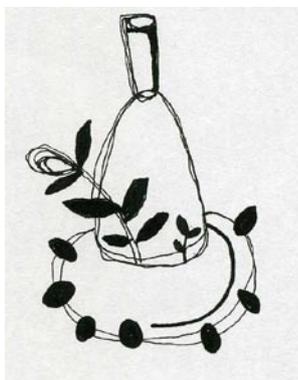
今ここに、ケーンとこうして過ごす時間、息を継いでいるわずかな空間。ここには、千冬もない。千冬と恋愛していたときですら、こんな暖かい高揚感を感じたことはなかった。性欲の下心があったり、言葉のちよつとした行き違いに心の襞を広げたりした。ケーンと二人だけいる高揚感、あれらの時間が持っていたものとはまるで性質が違う。自分の愛する子供といっしょにいる、というだけの幸福とも違う。それ以外の、何かもつと大きくて豊かなも

のだ。

十二月、午後五時二十分。沿道の櫟の大木がゆさゆさとその図体を揺らせている。夜になって、急に風が出てきて、その風がもう吹き荒れている。櫟は幹も葉も暗闇の中に隠れているが、巨大な存在感がそこにある。この大櫟まで来て、ようやく道の半分だ。

「アヴァンティ」では教授が涼しげな音を立てて水を転がしながら、好物のウイスキーを啜っている。スターンは訛りのある声で教授の話に相槌を打っている。ケーンは固まったまま外の闇に目を向けている。その姿を良平はバックミラーを通して見続ける。

良平とケーンは乾いた黒い道路の上を家に向かってひた走る。光は、ない。光は、ケーンだ。



藤原恵一

ふじわら けいいち

1951年 埼玉県生まれ
74 東京大学法学部卒業
同年 金融機関に就職
2003 金融関連の会社に転職、
現在に至る
同年 大学卒業前後に執筆した
「小さな、小さな、」と「太陽
の笑い顔」をまとめ、短編集
「小さな、小さな、」として文
芸社より出版

趣味、音楽鑑賞、仙人掌

中学三年のときに、国語の先生に作文を誉めていただいていた、すっかり文章を書くことが好きになりました。そして将来はそういった方面で仕事をしたいと漠然と考えるようになりましたが、世の中そんなに甘いものではないですね。大学時代にチヨコチヨコッと、会社に入ってからそれはそれこそチヨコッと小説を書いてみたのですが、とても満足のいくものは書けません。そうしているうちに会社の仕事が忙しくなり、忙しい仕事を追いかけていると仕事も面白くなってきて第二の会社に転職するまで、会社人間として必死に働いてきました。

籍をきれいに移して第二の会社に落ち着いて見ると、足がなくなっただけで何だかフワッと浮き上がったような気持ちです。……何もしなければ、もうこのままです。最初、乏しい蓄えを取り崩して昔の小説を出版してみました。親しい友人に配って歩きましたが、やはり足は生えてきません。

私は少しずつでもいいからもう一度小説を書いてみることにしました。今回初めて少し納得できるものが書けたのでどうしようかと思っていたところ、たまたまこちらで四五歳以上の高齢者を対象にした文学賞を募集していることを知り、まさに我が意を得たような思いで応募させていただきました。

「文芸思潮の五十嵐です」という編集長の声は、私の心の空洞の中に沁みわたるようになってきました。大学に合格したときより、求愛の承諾を得たときより、私はうれしかった。編集長の声とあの瞬間の感動を小さく切つて額にして一生飾っておきたいと思った。それはできないことだけれど、ありがとう、ありがとうございました。



文芸思潮臨時増刊号

エッセイ宇宙

4

THE ESSAY COSMOS

第5回「文芸思潮」エッセイ賞作品集

第5回エッセイ賞の作品を集めた豊かなエッセイ集
エッセイ宇宙が豊かに広がります

アジア文化社

945円(税込)

ご注文はアジア文化社まで

TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848